



お茶の水女子大学 グローバルCOEプログラム 格差センシティブな人間発達科学の創成 ニュースレター 第5号

2面 国際シンポジウム／基礎問題プロジェクト

3面 公開セミナー

4面 特任教員の紹介／RA 研究報告会／開催予定

広報委員会委員長挨拶

広報委員会は2009年度も、本事業の推進状況や成果についての情報発信に取り組んで参りました。ホームページには英語の他、2009年7月より中国語・韓国語のページを新設し、シンポジウムの動画発信も行いました。また、今年度も2回、ニュースレターを日本語版と英語版で発行し、国内外の大学や関係機関に送付しています。内容は各領域の活動報告、数多くのシンポジウム・セミナー、

研究会や公開講座の報告など多様で、社会的公正に敏感な女性研究者を育成し、国際的にも通用する教育研究拠点を構築するために、若手研究者の活動内容も随時紹介しています。その他にセミナーやシンポジウム、基礎問題プロジェクトの研究成果、公募研究成果をまとめたProceedingsを随時刊行しており、英文モノグラフでは研究成果を国際的に発信しています。



広報委員会委員長 三輪 建二

国際セミナー

1. 中西部アフリカの子ども・幼児教育にみる格差

2009年10月2日(金)、中西部アフリカのフランス語圏5カ国(カメルーン、セネガル、ニジェール、マリ、ブルキナファソ)の中央または地方の教育行政官・視学官、教員養成校教員12名を招き、各国における子どもの現状や幼児教育の格差について議論する国際セミナーを開催しました。各国の報告者より、幼児教育制度、就学統計、子どもの発達や就園をめぐる格差(男女間格差、地域間格差、民族間格差など)、幼児教育に関する問題点及び課題、研修において学びたい知識や技能、などについて発表があり、アフリカ5カ国間および日本側の専門家との間で活発な意見交換がなされました。32名が参加しました。

2. 中西部アフリカ幼児教育改善アクションプラン

2009年10月20日(火)、左記5カ国からの参加者12名が、各国の幼児教育の改善に向けた行動計画を中心に報告しました。これらの行動計画は3週間のJICA研修の成果として、日本の幼児教育制度、政策、歴史、現場での保育実践、保育理論、格差是正策、住民参加の促進、地方における工夫、障害児教育、教材作成ワークショップなど、様々な学びの集大成として作成されたものです。アフリカ5カ国間での意見交換のみならず、日本側参加者、援助機関関係者、現地の初等教育政策の責任者からも有益なコメントが出され、活発な議論が展開されました。参加者は29名でした。



第3回国際シンポジウム

「子どもの遊び・学びの進化と深化：文化・社会・歴史の制約を解き明かす」

子どもは、日々の遊びや生活を通して世界づくり・地図づくりを進め、生活に参加する中で多くを学んでいきます。子どもにとって遊びとはどのような意義をもつのか。今年度のシンポジウムでは、日韓の進化心理学、文化人類学、幼児教育の専門家にご講演いただき、子どもが遊びを通して学ぶ過程について考察を深めました。

【日時】

2009年10月17日(土) 13:00～17:00

【会場】

お茶の水女子大学共通講義棟2号館201教室

【基調講演】

松沢哲郎(京都大学霊長類研究所長・教授)
「チンパンジーの『教えない教育、見習う学習』」

【パネリスト】

李基淑(韓国・梨花女子大学教授)

「子どもの遊び：概念、社会文化的現象、伝統遊びへの再考」

原ひろ子(本学名誉教授)

「1960年代初頭のカナダ北西部 狩猟採集民カショーゴティネ(“Hare Indians”)の子どもの生活：格差センシティブであることと、普遍性センシティブであること」

同シンポジウムには、約100名が参加しました。冒頭で松沢哲郎教授に、世界的に有名な「アイ・プロジェクト」におけるチンパンジーのアイの子育てぶりを通して「教えない教育、見習う学習」についてご講演いただきました。続いて李基淑教授には、韓国における加熱した早期教育の様々なデータをご提供いただくとともに、そのような社会で子どもの成長における遊びをどのように推進していくかお話しいただきました。また、原ひろ子教授には、厳しい自然環境で生きるヘアインディアンの世界には大人が子どもに「教える」「教育する」という概念がないことなどについてお話しいただきました。チンパンジーの独自の遊びの有無、人間にとっての遊びの定義、早期教育の長期的影響などに関する



指定討論者からの質問を糸口として、子どもの発達における遊びの意義や、学びの過程、子どもと大人による知の共同構成のプロセスについて論考を深めることができました。日韓両国語(韓国語ウィスパーリングと同時通訳)を用いて充実した議論が行われ、アイ・プロジェクトの微笑ましい映像に会場が沸くような場面も見受けられました。当日の講演内容は、お茶の水女子大学グローバルCOEのホームページより動画でご覧いただけます。

<http://ocha-gaps-gcoe.com/>

基礎問題プロジェクト

お茶の水女子大学グローバルCOEでは、「国際的格差」「教育・社会的格差」「養育格差」の3つの研究領域間の相互理解と連携を深め、プログラムの原理的問題を領域横断的に検討するため、「基礎問題プロジェクト」研究会を実施しています。2009年度後期には、養育環境格差領域と教育・社会的格差領域が主催する研究会が行われました。

第4回研究会 養育環境格差領域

「子ども期のクオリティ・オブ・ライフの測定と関連要因の探求」

日時：2010年1月10日(日) 13:00～17:00

会場：お茶の水女子大学

文教育学部1号館第1会議室

参加者：15名

基礎問題プロジェクトの第4回研究会では、子ども期のクオリティ・オブ・ライフ(QOL)の測定の問題や規定因について公開セミナーを行いました。第1部の基調講演では、青山学院大学の古荘純一教授より、子どものQOLに関する日本の研究の現状および今後の課題について包括的な報告をいただきました。聖心女子大学の柴田玲子氏にはQOLの測定具としての日本語版KINDLに

ついての概説、昭和大学の根本芳子氏からは日本語版KINDLの幼児版開発研究の中間報告、跡見学園女子大学の松崎くみ子教授には臨床場面でのKINDLの使用ケースについてのご発表をいただきました。第2部の研究発表では、KINDLの尺度としての心理統計学的考察、乳児期の親子のQOL、メディア使用とQOL、思春期の子どもたちのQOLについて、多岐にわたる内容の報告がなされました。フロアからも多くの質問やコメントがあり、発展的な議論が活発に行われました。



第5回研究会 教育・社会的格差領域

「子どもの貧困をめぐって」

日時：2010年1月13日(水) 15:30～17:30

会場：お茶の水女子大学本館103教室

参加者：30名

基礎問題プロジェクトの第5回研究会で

は、国立社会保障・人口問題研究所の阿部彩氏をお迎えし、「子どもの貧困の動向と社会保障制度の課題」と題して、現代日本における子どもの貧困問題についてお話しいただきました。前半では子どもの貧困率の定義をめぐる問題や、貧困が子どもの学力、進路選択、家庭環境、健康などに与える影響について豊富なデータが示され、後半では子どもの貧困にかかわる日本の社会保障政策の問題点が、国際比較の視点から明らかにされました。コメンテーターの平岡公一・本学教授からは、子どもの貧困問題の優先性をめぐる問題、社会保障体系における子どもの貧困の位置づけ、少子化対策との関連性についてイギリス社会保障政策研究の立場から議論が呈示されたほか、フロアからコメントや質問も提出され、時間いっぱいまで充実した議論が行われました。



公開セミナー

第4回東アジア“子ども学”交流プログラム「言葉の発達と脳科学：東アジアでの研究と実践」

2009年9月11日(金)、チャイルド・リサーチ・ネット(CRN)と共催で、公開セミナーを開催しました。定員200名の会場がほぼ満席になるほどたくさんの方々が足を運んでくださり、会場は終始熱気に包まれました。子どもはどのように言葉を獲得し発達していくのか、脳科学研究で現在どこまで解明されているのか、また、社会的・文化的環境、親子のかかわりなどによって言葉の発達はどのように影響されるのかなどについて小泉英明・日立製作所

フェローが基調講演を行い、中国側からは姜勇・張明紅の両氏(いずれも華東師範大学副教授)が「上海市幼稚園教師の文化的状況」と「中国の幼稚園における早期読書教育活動のデザインと実施」について、それぞれ講演を行いました。グローバルCOEプログラムの国際格差班で取り組んでいる「リテラシーの習得に及ぼす文化社会の要因の影響についての国際比較調査」についての日中韓比較の結果も報告され、フロアを巻き込んだ活発な討論が展開さ



れました。総括として親への子育て支援の重要性が指摘され、政策提言の方向性が導出されました。

第6回日本子ども学会議「子ども・環境・脳科学」



2009年9月12日(土)・13日(日)に、日本子ども学会と共催で、第6回日本子ども学会議「子ども・環境・脳科学」を開催しました。子ども学会議は、子どもを対象としたさまざまな分野の研究者、教育者、実践者が一堂に会し、さまざまな視点から意見を交換し、子どもの生活と発達に資する提言を行ってゆくことを目的とした学会です。今回は保育環境、子どもを取り巻く情報、ゲームなどについて、シンポジウム形式でその現状と課題、将来の展望に

ついてさまざまな立場から検討を行いました。冒頭、小林登・日本子ども学会代表より「チャイルドケアリング・デザイン」という新しい概念が提唱され、本田和子・本学名誉教授より現代社会における子どもへの対応についての鋭い分析を含んだ基調講演「子どもが忌避される時代」が行われました。最後に発達心理学の「神話」を批判した鈴木光太郎・新潟大学教授らによる鼎談が行われました。250名が参加しました。

第1回 JELS セミナー「国際比較からみる学力調査：国際調査と国別調査」

2010年1月8日(金)、グローバルCOEプログラム教育社会的格差領域JELS(「青少年期から成人期への移行についての追跡的研究」)は学内の特別教育研究経費事業CSDプログラム(「コミュニケーション・システムの開発によるリスク社会への対応」)とセミナーを共催しました(全3回)。垂見裕子・GCOE特任助教からはPISA調査のデータ概要とPISAにおける日本の学力の特徴について報告がありました。王杰・GCOE特任講師が2007年以降

の中国大陸における独自の学力調査の展開の概要と課題を説明し、中島ゆり・JELS研究員は主に2007年から実施されている全国学力・学習状況調査の概要と課題、さらにJELSで実施している学力調査の概要と課題について報告しました。コメントターの耳塚寛明・GCOE拠点リーダーやフロアからも多くの質問・コメントが出され、活発な議論が行なわれました。参加者は16名でした。



第2回 JELS セミナー「子どものキャリア形成：文化・学力・進路」



2010年1月22日(金)の第2回セミナーでは、大多和直樹・東京大学助教と中西啓喜・蟹江教子の両JELS研究員がJELSの収集データを用いて、それぞれ「トラッキングと生徒文化」「現代高校生の進路選択」「児童・生徒の進路選択と学力」について報告を行いました。父親の学歴により進学トラックに差があること、地方都市では非進学校に入学した生徒の場合、希望する進路を大学に変更する生徒は少ないこと、小

中学生は自分の成績を基準に希望する進路を決める傾向があること、進路希望は家庭の経済力の影響を受けていないことなど、興味深い結果が多く示されました。コメントターである牧野カツコ・本学教授からは、いずれもタイムリーな話題であり、ぜひ結果を政策提言にいかして欲しい、とのコメントが寄せられました。20名が参加しました。

特任教員の紹介

本拠点では、事業推進担当者とともに、広く国内外から公募した若手教員が研究推進の中心的な役割を果たしています。特任准教授、特任講師、特任助教の他、研究と業務に従事する特任リサーチフェロー、特任アソシエイトフェローがいます。今号では3名のリサーチフェローをご紹介します。



特任リサーチフェロー

瀧田 修一

専門領域は開発経済学・教育経済学です。開発途上国の教育開発政策・計画、その評価手法や効果的な国際開発協力のあり方に関する研究、また、途上国における教育と経済成長、貧困削減の関連性に関して実証的に研究を進めています。GCOEでは国際的格差領域に所属し、主に東南アジア地域を中心に国ごとに異なる「教育と格差・貧困問題」の構造を解明するため、現地研究者との共同研究に取り組んでいます。特に2009年は日メコン友好年であり、GCOE国際的格差領域としてもメコン地域諸国との学術交流の拡大が実現されました。

開発途上国の教育と経済成長、貧困削減の関連性に関して実証的に研究を進めています。GCOEでは国際的格差領域に所属し、主に東南アジア地域を中心に国ごとに異なる「教育と格差・貧困問題」の構造を解明するため、現地研究者との共同研究に取り組んでいます。特に2009年は日メコン友好年であり、GCOE国際的格差領域としてもメコン地域諸国との学術交流の拡大が実現されました。



特任リサーチフェロー

松本 聡子

専門領域は環境心理学・発達心理学です。子どもたちをとりまく環境と発達との関わりについて、乳幼児

期からの縦断研究を通して研究をしています。GCOEでは養育環境格差領域に所属し、ケア・クオリティ（養育の質）、クオリティ・オブ・ライフ（生活の質）などの格差が生じるプロセスについて、子どもをとりまく発達の環境という視点から、主に縦断調査の手法を用いて、研究活動を行なっています。また、GCOE領域融合研究として研究プログラム委員会が実施している、中高生を対象とした3年間の追跡調査に携わっています。



特任リサーチフェロー

李 美静

専門領域は言語心理学・発達心理学です。国際結婚家庭の子どもの言語をめぐる言語教育と異文化適応の問題

を検討し、子どもの言語発達の過程に関わる心理的・社会的・文化的要因と家庭における親子のコミュニケーションや保育園・幼稚園や学校における教育的働きかけについて縦断研究を進めています。GCOEでは、国際的格差領域に所属し、地域格差と多文化・多言語環境に生きる子どもの言語教育についてや、外国人またはその配偶者が抱える異文化教育問題とその基礎づくりの段階にある就学前教育や保育の問題を研究しています。

RA 研究報告会

2009年度のRA（リサーチ・アシスタント）32名（うち1名は大学院修了により前期で退職）のうち、公募研究を実施している者を除く27名による研究報告の機会をもちました（公募研究採択者は来年度初めに別途研究報告の機会をもつ予定）。1回目（2009年10月1日）は原則としてD2以上に、2

回目（2010年2月12日）は原則としてD1に、それぞれ報告してもらいました。各報告にはコメンテーターを設定し、1回目はD1が、2回目はD2以上がコメントしました。本研究拠点は心理学・社会学・教育学という3つの学問領域で構成されていますが、これらの学問領域の若手研究者が相互理解を深めるとともに自分の学問領域の独自性を認識できるように、学問領域の異なる報告者とコメンテーターを組み合わせました。初歩的では

あっても研究の本質を鋭く突くような質疑も出され、有意義な研究交流となりました。



2010年度開催予定の情報

2009年度公募研究報告会

2009年度公募研究者19名による研究報告会を開催します。

日時：2010年4月12日（月）13:00～17:00

会場：お茶の水女子大学本館103号室

詳しい内容はお茶の水女子大学グローバルCOEのHPをご覧ください。

<http://ocha-gaps-gcoe.com/>

第6回 基礎問題プロジェクト研究会 「言語発達の研究方法論再考」

国際格差の領域では下記の通り公開セミナーを開催する予定です。皆様のご来場をお待ちしております。

日時：2010年6月16日（水）14:00～17:00

会場：お茶の水女子大学本館103号室

講師：内田伸子教授、李美静特任リサーチフェロー

詳しい内容はお茶の水女子大学グローバルCOEのHPをご覧ください。

<http://ocha-gaps-gcoe.com/>

編集後記

今年度下半期では国際シンポジウムのほか、本プログラムの3つの研究領域間の相互理解と連携を深めるための「基礎問題プロジェクト」研究会を実施しました。また、公開セミナーの開催により、国内外の研究者による学術的な交流が活発に進められました。今回のニュースレター5号では様々な研究活動の紹介を中心に掲載しました。

編集者 広報委員会 李 美静

発行 お茶の水女子大学 グローバルCOEプログラム
「格差センシティブな人間発達科学の創成」
〒112-8610 東京都文京区大塚2-1-1 文教1号館103
グローバルCOE事務局
Tel/Fax: 03-5978-5247
E-mail: jim-gcoe@cc.ocha.ac.jp
URL: <http://ocha-gaps-gcoe.com/>